

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十年三月一日発行（毎月一回一日発行）
第十四巻第十一号（通巻第一六七号）

鈴



鈴
子
追
悼
号

山口誓子先生追悼号

第167号

3. 2008

俳句雑誌

GLOCKE

初
虹

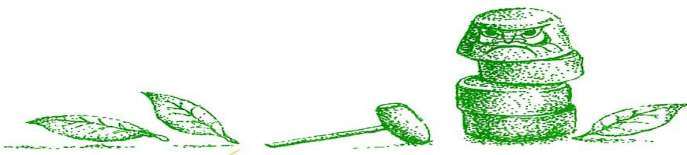
品川 鈴子

床暖房太郎冠者めくへたり腰

石鎚の樹氷いかにと誕生日

雛飾る女専の友に先立たれ

手に触れる病巢となり芽木の雨



モルヒネに余る疹きに亀啼けり

芽木の雨しみて袖垣倒れたり

悴むにあらず合掌解けずして

田邊朔郎様

寒あやめ気^け配^{はい}留まる邸あと

訃の続く週とはなりぬ忘れ霜

初虹に高階の句座ひと休み



玉

鈴

吟

兵庫 浮田 胤子

大いなる日の出を見たる十二月
動物園冬眠の鱈ひからびて
雪吊が完成したる兼六園
目まぐるし銀杏並木の変わりよう
いそがしき一年生の冬休み

兵庫 馬越 幸子

雪纏ふ化粧櫓は十万石
白鷺城翼すべてに雪積みて
魔物棲む天守雪被て輝けり
菰樽の墨書艶やか初戎
初戎果てお化け小屋畳まれる

大阪 大井 邦子

裸坊祭総身に朱き宮印
寒満月若衆色めき荒神事
舞ふ足袋の時に激しく毛利邸
冬紅葉無礼講にて連句の座
山頭火の径を辿れば日の短か

東京 大川富美子

しなやかな指がとぼすカルタ会
みどりごの目つむりしまゝ初笑ひ
裾ふんで着丈を正し着衣はじめ
しろがねの機影ひとすぢ初御空
初釜の萌黄すがしき帛紗ふくさかな

香川 大空 純子

境内の銀杏落葉が座布となり
銀杏の木骨で突き刺す冬の空
雨浸みし雑木紅葉の山迫る
試験の日赤色マフラーきつく捲き
着ぶくれて肩こり更に増すばかり

兵庫 岡 有志

氷盤にスピン加速しポーズとる
決裂の記事焼箸を包みこむ
母住まぬ家とはなりぬ石路の花
ルミナリエ症候群の人の列
介護棟歯のなき老も聖菓食ぶ

埼玉 岡田 章子

挽ぎたての柚子を搾りて膾かな
不老不死の湯とて浸りぬ冬の浜
サッカーの子等で占められ野球場
日を浴びて富士に向き合ふ柿すだれ
雪晴れやくぼみつぶさに甲斐の富士

愛媛 岡本 峯代

形見なるゴルフセーター着て素振り
亡き父へバースデーケーキと蕪蒸
忌明けして突発性難聴冬もみじ
玄関のゴルフバックも注連もらい
返り花ひとりの吾にただ一輪

大阪 岡本 幸枝

ガラス戸に 聖樹点滅 厨事
「かぐや」からあばたの月のセレナーデ
身の丈に合わぬ軍服憂国忌
芸術祭ダイエツト前の伎芸天
小学生見繕ひてもふぐと云ふ

大阪 奥田 妙子

一世紀健やかなれと七五三
悪戯の金メダリスト七五三
帰国後の三寒四温身に付かず
冬ざるる輪島朝市婆が店
巖門の洞窟くたく冬の波

兵庫 勝野 薫

一面に朴落葉して森明り
榎の実挽ぐ義経祈願せし社
寂かなる源氏の祖廟白椿
竜脳菊暗き納戸に衣裳櫃
神殿の正筭目に寒雀

兵庫 金田美恵子

荊棘線を張り巡らせる梅の園
苑の道譲りゆずられ梅日和
ハート型の絵馬重なりぬ梅の花
また同じ人と出会へる梅の園
梅日和今日は特急止まる駅

徳島 河井富美子

電飾の聖樹も星も点滅す
手袋を入れては出して旅仕度
干し柿のすだれにぎはふ峡の村
水洩や野球談義に熱こもる
ヨットハーバー電飾のクリスマス

兵庫 川合まさお

山紅葉櫓音遠のく大堰川
色淡き凍てあぢさゐや名張川
護摩堂の閉めた障子の白さかな
紅葉茶屋女主の声通る
冬ざれの寺領に芥焼く煙

薬草歳時記

(一六六) 杉の花 (杉花粉)

須賀悦子

次の樹へ吹き移りゆく杉花粉

右城 暮石

京都盆地北側を区切る山地を北山と呼ぶ。この北山に通る周山街道は、北山杉の産地として知られ、杉の美林が続く。川端康成の小説「古都」の舞台ともなったところである。

又、世界遺産にもなり有名な屋久島の屋久杉、縄文杉も三千年の昔より地球上にあつて、優秀な建築材として育てられていた。杉は、大塚敬節先生の「漢方と民間薬百科」に拠ると、その葉、若芽、木皮、節、やになどが昔より民間薬として使われていたという。例えば、杉の生の葉を燻して「水虫」に、葉を煎じて「うるしかぶれ」に、若芽をすりつぶした汁を「腫れもの」に、木皮の甘はだをすりつぶして「へびの咬み傷、ハチ刺され」に、又、甘はだを黒焼きにした粉末を「切り傷」につける、むし歯の痛むところにはやにを詰める、「疥癬」に杉の若い葉をすりつぶして、その青汁を毛筆で痒いところに塗る等々。

薬用部分となる樹幹の成分にクリプテン、フェノール、樹皮にタンニン、スギオールを含み、殺菌作用、収れん作用があるので、止痛薬、消炎鎮痛薬として慢性気管支炎、歯痛、やけど等にも使われていた。

ところが戦後の復興資材として、全国に大量に植林された杉が近年になり着花林齢を迎え、飛散する花粉量が最高に増えたといわれる。原因のひとつとなっているこの杉花粉が花粉症のアレルゲンになり、これが三月頃の季語にまで取り上げられるようになった。杉は雌雄同株で雄花は楕円形で枝端に群生し、果序となる。雌花は球果となり小枝の先につく。花期の二月下旬から三月四月にかけて、雄花が花粉を飛ばす。その量は前年度の気候に左右されるが、前年の夏に雨量が少なく、日照時間が長く、気温が高いと花粉飛散量が増加するといわれる。アレルギーの原因である花粉は大きさ三〇〜四〇マイクロミリ、遠心極に一個の花粉管口がありその管口が突出して鈎状に曲っている。最近アレルギー性鼻炎が急速に増加している。季節に関係なく一年を通じて症状がでる「通年性アレルギー性鼻炎」は、ハウスダストやダニ等が関与して原因アレルゲンがはつきりしないものが多いが、「季節性アレルギー性鼻炎」はほとんどが花粉が原因で花粉症と呼ばれる。現代社会では大気汚染が進み、ストレスの多い昼夜逆の生活で副交感神経ばかりが働き、身体は過剰なアレルギー反応をおこす。古来より杉は神木にもなり、本草綱目にも中国の三国志にも倭国の「倭木」(スギ)として掲載されているが、このような花粉症はいつの世から流行ったものであろうか。

参考文献 「原色牧野和漢薬草大図鑑」北隆館

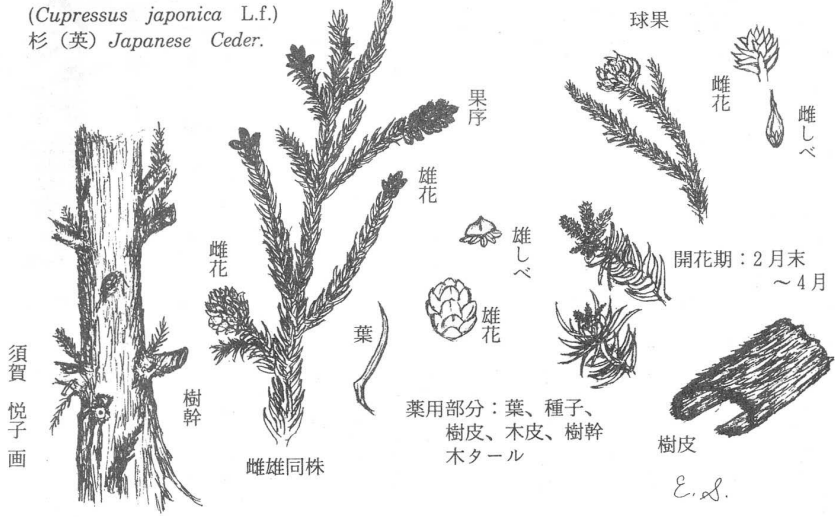
「漢方と民間薬百科」大塚敬節著 主婦の友社

「源氏物語の庭」廣江美之助著 城南宮

著者略歴神戸薬科大学卒業薬剤師

スギ (ヨシノスギ、オモテスギ)〔スギ属〕(ヒノキ科)

Cryptomeria japonica (L.f.) D.Don
 (*Cupressus japonica* L.f.)
 杉 (英) *Japanese Cedar*.



風神の蹴散らしてゆく杉の花	五十鈴川黄変杉の花散りて	七人の敵の一人は花粉症	花粉吐く杉や夕月まだ寒し	花粉吐く杉のしばらくして照りぬ	つくばひにこぼれ ^{うか} 泛めり杉の花	峡空へ吹きぬけ杉の花けぶる	奉納のしやもじ新らし杉の花	ただよへるものをふちどり杉の花	一すぢの春の日さしぬ杉の花
塩出 眞一 (ぐろっけ)	品川 鈴子	伊藤 白潮	古賀まり子	岡井 省二	松本たかし	山口 草堂	杉田 久女	富安 風生	前田 普羅

鈴の奏

品川鈴子選

ノーサイド汗泥塗れが一行に 大阪 弓場 赤松

静電気指先に鳴る冬早

癌癒えてゆったりと酌む去年今年

身の丈に生きて御礼の初詣で

月仰ぐ昼間出会いし靴磨き

懐に恵比寿大黒からす瓜

七五三帯も袂も抱かれ来る

音立てて紅葉降るなり富本銭

鉄塔に作業する人小春空

着膨れてアブシンベルに日の出待つ

月冴ゆる千夜一夜の師走かな

影長き夜の神殿冬の湖

そのままも熱爛もよし忘年会

眺めては唾の湧き出る庭蜜柑

風呂上り程よき加減関東煮

ひきつゞき始末な暮し師走くる

刈り終ふを待ち測量の一町田

兵庫 村田とくみ

色褪せるまで掃き寄せず柿落葉

バス満員怒鳴られをるは^お大根

同級会栗の落つ音聞きたくて

木枯しや逆上りして揺れる子に

犬小屋の毛布の下に黒い鼻

冬満月わが住む星の青きとや

じいちゃんによく似た声のサンタかな

盲導犬首輪になびく赤い羽根

独り居にカボチャ一個を持って余し

そゞろ寒抱っこねだりてすがる亀

片付きし部屋ひっそりと火の恋し

棘ありて柚子を採る竿意に副はず

チューリップ「浅く植ゑな」と店の人

干支ねずみ尾の様変へて縫ふ夜長

柚子を炊く充分晒し淡白に

冬日影団地百棟越えて海

柚子の湯に一日休暇の足延べて

兵庫 松本 恒司

神奈川 永塚 尚代

兵庫 小野 春子

愛媛 濱田ヒチエ

秀
鈴
記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 師 岡 洋子 〃

*選句は全て 品川鈴子

静電気指先に鳴る冬日早

弓場 赤松

静電気は冬の乾燥した折など、物の表面に静止している電気が、触れる瞬間に体へどつと流れてくる。それは、個人差や触れ方にもより、思い切つて一気に握れば、接触面が広くて、さほど感じないのだが、怖々出す細い指先には大量の電気が殺到して、激しい音や火花が散る。私も過敏症で遣り切れない現象。風物詩にし難い句材を如実に詠んだ。

月仰ぐ昼間出会いし靴磨き

磯田せい子

月をしみじみ眺めるのは、仕事から解放された帰り掛けならではこのことで、誰しも心のゆとりを取り戻す風情。ふと見るとどこかで出会った人が居る。そういえば昼間は俯いて靴磨きに精を出していたが、伸び伸び天上を仰いでいる姿もいいものだ。

着膨れてアブシンベルに日の出待つ

国永 靖子

アブシンベルは遺跡の多いエジプトでも最南端。大神殿と小神殿が移築され、アスワン・ハイダムの建築による水没を逃れた。底冷えする砂漠の神殿でしつかり重ね着をし、日の出を待っていると、太陽神を崇めた古代の人々と一体化していくよう。

眺めては唾の湧き出る庭蜜柑

林 美智

最近の蜜柑は品種改良が進み随分甘くなっているが、我々の子供の頃は身震いする程すっぱく「庭になりましたので」とお隣りから頂く蜜柑のすっぱかったこと。この庭蜜柑も本来の味を頑固に守り何ともすっぱいのである。庭蜜柑とそれを眺める作者だけの構成ながら（唾の湧き出る）で臨場感のある一句に。

同級会栗の落つ音聞きたくて

村田とくみ

晩秋のある日、同級会の案内状が。出席しようか、欠席にしようかと迷う、心にふと故郷の大きな栗の木が思い出さ

れた。静かな夜、屋根に落ちる栗の音、お母さんの栗ごはん、友達と拾った栗、懐かしい顔々々。やっぱり「出席」。(聞きたくて)に故郷への心情、又こもごもの思いが感じられ、ほのぼのとした余韻を生む。

木枯しや逆上りして揺れる子に

永塚 尚代

逆上りは子供にとつて案外苦手なもの。それだけに練習を重ねやっと出来た時の喜びはひとしお。何とか持ち上げた体を鉄棒に二つ折りにして揺れている。逆上りの出来た嬉しさを樂しむ様に。木枯しに吹かれながら。

(木枯し) という情緒を消した季語で子供の澁刺とした姿が生き生きと見えてくる。

そぞろ寒抱っこねだりてすがる亀

小野 春子

愉快的な句。ペットの亀なのか、はたまた顔馴染みの亀なのか。そぞろ寒に抱っこをねだりてすがる亀、何ともかわいではないか。しかし季語の(そぞろ寒)はぞくつとする寒さ。ならば案外「あらいやだ」と思っているのかも知れない。(そぞろ寒)により、亀に対する愛しさと気味の悪さが緋い交ぜになった複雑な気持が窺える。

干支ねずみ尾の様変へて縫ふ夜長

濱田ヒチエ

家事も済んで自分ひとりの部屋にこもり、更けゆく秋の静けさの中、来年の干支ねずみを縮緬の布で作っておられるのであろう。しっぽの位置や長短、曲げ具合等でねずみの愛らしさがひきたってくる。(尾の様変へて)で贈る相手に合わせて、尾の表情を工夫しながら針を進める手の動き、優しい目差が、秋の灯に浮んで見える。

句仲間と出会ふ古書街冬並木

松本 恒司

並木道に添っての古書街。今はすっかり葉を落し裸木となつているが、都会の古書街らしい風景。散歩をかねて、ふらつと出掛けると、句仲間にはつたり。「お目当てのもののみつかりましたか」と立ち話。比較的暖かな冬の日の一齣のスケッチ。

下五の冬並木で一句の声調が整い、すつきりとした印象に。